

「3項8号」適用をはじめとする差別・分断攻撃を許すな！

「抜てき」と「処分」が2マル生の常とう手段

日刊 勤労千葉

82.6.14

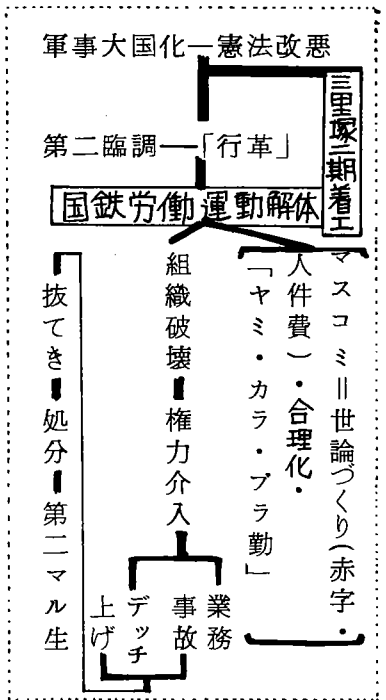
No.1069

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六（公衆）品三三（22）七二〇七

抜てき昇給を目的化し、処分を乱発する第二マル生の攻撃を糾弾するとともに、合理化のために手段を選ばない、国鉄当局の組織破壊攻撃を粉碎しなければならない。
一人一人が処分攻撃の重大性を再認識し、怒りを燃やして反撃しなければならない。

思い起せ！あの「マル生」を！
思い起こせば、一九七〇～七一年、国鉄マル生攻撃の吹き荒れる中、「再建」に名を借りた、合理化の中で、その中心になったのは、「アメとムチ」の攻撃であった。「アメとムチ」とは、昇給・抜てきを行う一方で賃金カット・処分という対比の中にあつた国鉄労働者を「アメとムチ」の手段をもって差別し、合理化の重要な環としての組織破壊を目的としたものに他ならない。このために、多くの仲間が多くの同僚が、大きな出血も恐れずこれと真向から対決した。これらの闘いは、その組織的存亡をかけた壮絶な闘いとなった。
国鉄「再建」の名のもとに、常に犠牲を強いられてきたのは労働者であった。
今日かけられている攻撃は、それを上廻る政治的目的をもった大攻撃である。



組合と組合運動の絶滅こそが至上命令

今回かけられている攻撃は、その質において、量において、他に類例のない攻撃である。七〇～七一年のマル生は、国鉄内・職制および鉄労・右翼分子を先兵として攻撃をしかけてきたが、マスコミはおおむね国鉄当局の非を批判する論調であつた。

しかし今回は、第二臨調攻撃と同時に、マスコミを総動員しての反動デマ宣伝を先行させ、労働者側の実態など何一つ扱ひこともせず、反動的な世論の形成と同時に、権力が、直接職場に介入し、弾圧を加えるという構造で強行されている。国鉄攻撃は、第二臨調第四部会・マスコミ・国家権力・国鉄当局、そして何よりも重大なことには、既成の労働運動の指導部が全部、この攻撃の前に闘わずして屈服してしまつてしまつてしまつて、攻撃の全構図をみるときに支配権力のなみなみならぬ攻撃の目的をはっきりと読みとることが出来る。
すなわち、単に「赤字解消を目的とした合理化攻撃」とか、「私鉄並みの労働条件にあわせれば、攻撃はやむのだから、二～三割働き度を高めよう」

（いずれも勤労「本部」革マルの、反動的デマ論理）などという、単純な生産性向上運動などでは決してないのだ。現に今日、国鉄当局は、「マスコミ・本社・自民党」これだけを意識し、労働者には一遍の権利すら認めない、既得権剥奪攻撃をどんどん強行している。
全国四〇万国鉄労働者の
実力決起で、勝利しよう！

しかし、支配権力・国鉄当局の重大な誤りは、労働者によってこそ、この社会が支えられているという事実をあまりにも見くびつていて、このことだ。権力をゴリ押しし、労働者を抑圧することのみで、支配者側の目的を達成するとすれば、これは、好むと好まざるとにかかわらず、労働者の怒りが実力闘争となつて爆発することは、歴史的にいつても不可避である。
これに恐怖するからこそ、支配者側は、総体重量をかけて攻撃をかけてきているのである。われわれは、だからこそ、あらゆる職場において、抜てき・昇給・処分の攻撃をはっきりと見ぬき、これを粉碎しなければならぬ。

「タコツボ入り」と「働け運動」を労働者に強要する「本部」革マルは、当局の先兵だ

勤労「本部」革マル反動分子のように、目的意識的につくられた、支配者側の敵しい情勢の中にドップリとつかり、下部労働者に「タコツボ」に入つてじつとしていて、とか、自ら「働け」などとか、はては「国鉄防衛」なる反労働者の方針がいかなる立場に起つて言われているのかは、はつきりしている。かつて、「三項八号の適用が千葉局内は少なすぎる。当局はタルンでいる」などと言言をはいた松崎「東京地本委員長」の思想この言動こそが、支配者側の、国鉄当局の思想そのものではないか。

すべての皆さん。今日、当局が逐に再びふみ込んでこようとしている、「三項八号」差別・分断政策のまろみをしつかりとみぬき、労働者としての階級意識をはつきり決意し、労働条件・既得権を防衛する闘いに決起しよう。このことが、絶対に今なすべき重大な闘いである。うって一丸となつて闘いに起とうではありませんか。
☆「三項八号」による労働者への差別・分断攻撃を断じて許すな！
☆「働け運動」「国鉄を守れ運動」に代表される、国鉄労使一体化攻撃を、職場からの反撃で打ちくだき前進しよう！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！